

■令和 7(2025)年度学習院女子大学一般選抜・日本史 解答例・解説＜A 方式＞

【解答例】

大問Ⅰ

- 問 1 黒曜石 問 2 ① 問 3 志賀島 問 4 纏向（巻向）
問 5 広開土王（好太王） 問 6 沖ノ島 問 7 聖明王 問 8 ③
問 9 ④ 問 10 ③

大問Ⅱ

- 問 1 大内義弘 問 2 斯波 問 3 九州探題 問 4 如拙 問 5 風姿花伝
問 6 ④ 問 7 ② 問 8 ① 問 9 ③ 問 10 ②

大問Ⅲ

- 問 1 小田原 問 2 ④ 問 3 家斉 問 4 日本橋 問 5 一橋
問 6 ② 問 7 ① 問 8 ③ 問 9 三菱 問 10 大日本史

大問Ⅳ

- 問 1 ③ 問 2 原敬 問 3 翼賛 問 4 村八分 問 5 ②
問 6 ① 問 7 ④ 問 8 ③ 問 9 小林多喜二 問 10 新婦人協会

【解説】

2025 年の本学の出題形式の特徴として指摘できるのは、先ず設問数が 24 年と同じ 40 問であったことです。2020 年までは設問数が 50 問でしたが、21 年から 40 問に減少し、試験時間の 60 分に変更はないので、ここ 3 年間、受験生の負担は軽減されたことになります。次に 40 の設問のうち記述式が 22 問で、全体の 5 割強を占めること（23 年度までは 6 割だったので、割合はこの二年間若干低下しています）、文を選択させる正誤判定問題が 7 問で、全体の 2 割弱であったこと（昨年度は 6 問だったので、割合は若干上昇しました）、単純な語句選択問題が 6 問で、2 割弱であったこと（昨年度は 9 問だったので、割合は低下しました）、昨年度は出題された年代整序問題が出題されなかった、などです。設問数が同数で、正誤判定問題の割合が若干上昇し、年代整序問題が出題されなかったというのが、2024 年と比べたときの本学の出題形式の特徴ということになります。よって、本学の志望者は、漢字を正確に書けるように練習を積むとともに、正誤判定問題に対応するために、意味も分からず覚えているだけの歴史用語の数を増やすのではなく、歴史用語の正確な意味を身に付ける学習が求められます。さらに、来年度以降は出題が予想される年代整序問題に対応するため、歴史用語を学習する際に必ず時期を意識した勉強をする必要があります（些末な年号を覚えるのではなく、前近代の出来事であれば、何世紀前半・後半、近代以降であれば、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦勃発などの重大な歴史的事件の前後という目安をつけるということです）。以下で、大問ごとに難易度の高い設問と正誤判定の設問を中心にして解説を加えていきます。

大問 I は、原始・古代の海外との交流をテーマとしたリード文を使いながら、原始～7 世紀までの社会・外交・文化からの出題です。

問 8 の正解は③です。

①は「草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の 6 期に区分されている」のは、弥生時代ではなく縄文時代です。弥生時代は、早期・前期・中期・後期の 4 つの時期に区分します。

②は「擦文文化」が誤りです。水田稲作が東北地方北部にまでおよんだ弥生時代に並行する時期の北海道では、続縄文文化が成立しました。擦文文化は続縄文文化を継承したもので、7 世紀頃から 13～14 世紀までの 600～700 年間続いた文化で、この間につくられた土器の名前に由来します。

④の「石皿と磨石」は縄文時代に使用された磨製石器で、木の実などをすりつぶす道具です。弥生時代、脱穀に使われたのは木臼や堅杵です。農耕などに使用する道具は、図版などで現物を確認しながら、どの時代にいかなる用途のために使われたのかを学習することが重要です。

問 9 の正解は④です。

①は「土師器」と「須恵器」の説明が逆になっています。土師器は、古墳文化以降の時代に弥生土器に同じ製法で作られたもので、須恵器は、5 世紀に朝鮮半島から伝来した新しい技法で作られたものです。

②は「囲炉裏」が誤りです。5 世紀以降、朝鮮半島の影響を受けて、竪穴住居にはつくりつけのかまどがともなうようになります。山川出版社『詳説日本史探究』の p 30 に、この選択肢の文とほぼ同様の記述があります。

③は「大仙陵古墳出土の鉄剣」が誤りです。倭の五王の登場する 5 世紀、ヤマト政権では渡来人によって漢字の使用が始まりますが、その具体例とされているのが、倭王武に比定される「ワカタケル大王」の名の刻まれた熊本県江田船山古墳出土の鉄刀と、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣です。大仙陵古墳は、仁徳天皇が埋葬されたと伝えられる、大阪平野に築造された前方後円墳です。

問 10 の正解は③です。

③は「薬師寺」が誤りです。薬師寺は、7 世紀後半に天武天皇が皇后（のちの持統天皇）の病気回復を祈願するために創建されたとされる寺院で、その東塔は白鳳文化を代表する建築物です。

大問 II は、足利義満の生涯をテーマとしたリード文を使いながら、室町時代前期の政治・文化・外交からの出題です。

問 6 は④が正解です。

④の「紫衣着用の許可権」を持っていたのは天皇です。これを厳格な審査の下に行うことを定めたのが、江戸幕府が 1615 年に制定した禁中並公家諸法度、1627 年に幕府が後水尾天皇の紫衣勅許を無効としたことをきっかけに起こったのが、紫衣事件です。

①～③は、山川出版社『詳説日本史探究』の p114 の注 4 に関連する記述があります。

問 7 は②が正解です。

①の室町幕府の「政所」は将軍家の家政・財政を担当する機関です。

③の侍所の長官をつとめるのは、赤松・一色・京極・山名の四氏で、四職と総称されました。

④の室町幕府の「評定衆」は所領に関する訴訟を処理する機関です。

問 8 は①が正解です。

①は鎌倉公方として鎌倉府を開いたのは「貞氏」ではなく、足利尊氏の子である基氏です。

②～④は、山川出版社『詳説日本史探究』の p115 に関連する記述があります。

問 9 は③が正解です。

③は日明貿易における日本の輸出品が誤っています。銅・硫黄・刀剣が日本からの輸出品で、「高級（絹）織物や時期などの工芸品」は日本の輸入品です。

問 10 は②が正解です。

選択肢のなかには、京都五山の第四位の東福寺、第五位の万寿寺、鎌倉五山の第四位の浄智寺、第五位の浄妙寺を含むものがあって、一見すると厄介な設問ですが、決め手は京都五山第一位の天龍寺が選択肢のなかに入っているかどうかです。天龍寺は臨済宗の無窓疎石の提案で、後醍醐天皇の冥福を祈るために建立されますが、建立の費用を調達するために、室町幕府は天龍寺船を元に派遣しました。京都・鎌倉五山の第四位、第五位は学習したことがなくても、天龍寺は学習したはずですから、これらをふまえれば、決して正答できない設問ではありません。

大問Ⅲは、近世の庭園をテーマとしたリード文を使いながら、政治・社会・経済・文化からの出題です。

問 1 は小田原が正解です。

リード文だけから空欄アに正答するのは困難ですが、設問文に「豊臣秀吉の侵攻によって攻め滅ぼされた北条氏の居城があった」をヒントにすれば正答は可能です。関東の戦国大名である後北条氏が城下町としたのは、相模国の小田原です。

問 4 は日本橋が正解です。

関東大震災によって築地に移転する前の魚市場はどこにあったか、少し戸惑ってしまうかもしれませんが、江戸時代の魚市場がどこにあったかを思い起こせば正答できます。魚市場は江戸の日本橋と大坂の雑喉場でした。このほか、青物市場は江戸の神田と大坂の天満、米市場は大坂の堂島でした。

問 6 は②の五品江戸廻送令が正解です。

②の五品江戸廻送令は、幕末に列強との貿易開始にともなって起こった物価騰貴を鎮静化させるため、幕府が輸出されたくない五品（生糸・呉服・蠟・水油・雑穀）について、生産地から開港場のある横浜に直送するのではなく、必ず江戸の間屋を経由してから開港場に輸送することを命じたものです。しかし、イギリスの公使オールコックから通商条約に定められた自由貿易に反すると抗議され、実質的な効果を発揮することはできませんでした。

問 8 は③が正解です。

③は 17 世紀後半～18 世紀前半の徳川綱吉の時代の出来事ではなく、18 世紀後半の天明の飢饉のときの出来事です。天明の飢饉は、東北地方などに甚大な被害をおよぼした飢饉で、浅間山の大噴火や利根川の大洪水によって関東地方にも多くの損害を与え、寛政の改革を始める背景ともなりました。

問 10 は『大日本史』が正解です。

『大日本史』は、水戸藩の徳川光圀の命で 17 世紀後半に江戸の彰考館で編纂が始まり、1871 年の廃藩置県によって水戸藩が消滅したのちも編纂が続き、20 世紀初頭に完成を見た歴史書です。この編纂にかかわった

藤田幽谷・東湖父子、会沢安らは徳川斉昭の側近となり、(後期)水戸学を唱え、幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えました。

大問Ⅳは、近現代の選挙制度の変遷をテーマとしたリード文を使いながら、明治～昭和戦後期までの政治・文化・社会からの出題です。昭和戦後期からの出題は久方ぶりですが、ただし 0.5 問だけではありません。

問 6 は①の立憲同志会が正解です。

1915 年の総選挙を実施した第二次大隈重信内閣は、前年に発覚したジーメンス事件の責任を取って総辞職した山本権兵衛内閣にかわって成立し、立憲同志会の党首であった加藤高明を外相に起用して、第一次世界大戦への参戦、中国に対する二十一か条の要求の提示などを行いました。立憲同志会は第一次護憲運動に対抗するために桂太郎が作った政党で、桂の死後は加藤高明が党首に就任し、第一次世界大戦中に憲政会となり、1924 年の総選挙に勝利して加藤を首相とする護憲三派内閣を組織しました。この内閣の下で問 8 の解説にもある衆議院議員選挙法改正が行われ、男子普通選挙が実現しました。この、立憲同志会→憲政会→立憲民政党は、ともに大隈重信が 1882 年に結党した立憲改進黨の流れをくむ政党です。

問 7 は④の『明星』が正解です。

①の『文学界』は日清戦争の前後にロマン主義を掲げ、北村透谷の評論や樋口一葉、島崎藤村の作品を掲載した雑誌です。

②の『白樺』は日露戦争後に人道主義・理想主義を掲げた武者小路実篤らが創刊した雑誌で、文学のみならず、柳宗悦の民芸運動の活動の舞台ともなりました。

③の『ホトトギス』は、短歌・俳句の革新を行った正岡子規の友人が創刊した俳句雑誌であり、夏目漱石の『吾輩は猫である』なども掲載しました。

問 8 は③が正解です。

問 1 とともに、衆議院議員選挙法の改正により、選挙人資格がどう変化し、その結果、有権者の人口比がどう変化したのか、まではしっかりと学習してください。大日本帝国憲法発布とともに黒田清隆内閣の下で制定された時は、直接国税 15 円以上納める 25 歳以上の男子の選挙権が認められ、有権者の人口比が約 1 %、日清戦争後に第二次山県有朋内閣の下で改正された時は、直接国税の額が 10 円以上に引き下げられ、人口比が約 2 %、第一次世界大戦後に原敬内閣の下で改正されたときは、直接国税の額が 3 円以上に引き下げられ、人口比が約 5 %、憲政の常道期に加藤高明内閣の下で改正されたときは、直接国税の額の制限がなくなり、人口比が約 20 %、でした。そして、太平洋戦争後に幣原喜重郎内閣の下で改正されたときは、満 20 歳以上の男子のみならず女子にも選挙権が認められ、人口比は約 50 %となりました。

問 10 正解は新婦人協会です。

新婦人協会は、雑誌『青鞥』を創刊した平塚らいてうが、市川房枝らとともに結成した女性団体であり、女性参政権獲得運動を進めるうえで障害となっていた治安警察法第 5 条(女性の政治集会参加禁止)の改正のための運動を進め、改正を実現しました。

■令和 7（2025）年度学習院女子大学一般選抜・日本史 出題傾向と学習アドバイス

【出題傾向】

出題形式は、3年連続して大問が4題、問題数が40問で、変化はありません。論述問題の出題はなく、2025年は記述が5割強、記号選択が4割強、24年は記述が5割強、記号選択が4割強、23年は記述が6割、記号選択が4割、だったので、記述と記号選択の比率は過去3年間大きな変化は見られません。また、文を使った正誤判定問題は2025年が7問、24年が6問で、23年が12問、22年度が5問、21年が7問で、23年だけが例外的に出題数が多く、それ以外の年度では5～7問と大きな変動は見られません。他方、文を使った年代整序問題の出題はなく、24年が1問、23年が0問、22年度が2問、21年度は0問だったので、隔年で出題されていることになります。また、2022年と21年に出題のあった歴史用語だけを使った年代整序問題も、23年以降は出題されていません。年代整序問題は大学入試日本史の定番であり、来年度以降出題されることを想定した準備をする必要があるでしょう。

出題内容では、2025年には2024年度に出題された、史料を使った出題がありませんでした。24年度には教科書には掲載されていない「石井・ランシング協定」の史料を使った出題がありましたが、本学では過去にも「大政奉還」、「政体書」などの教科書に掲載されていない史料を使った出題があります。次年度がどうなるかはわかりませんが、教科書に掲載されている史料の学習に加えて、未見史料対策としては、一つ一つの歴史的事実を正確に理解しておくことが必要です。

過去3年間の出題時期および分野については、以下の表のとおりです。

		2025 年度	2024 年度	2023 年度
I	原始・古代	社会・外交・文化	社会・政治・文化	社会
II	中世	政治・外交・文化	政治・文化	外交・政治・文化
III	近世	政治・社会・経済・文化	出題なし	経済・社会・政治・文化
III	近代		文化・政治・社会	
IV	近代・現代	政治・文化・社会	外交・政治	政治・経済・社会・外交

出題時期は原始から近現代までで、2025年は2017年以来出題のなかった現代からの出題がありました（ただし、0.5問の出題です）。志望者が心がけなければならないのは、バランスのとれた学習です。学習していない時期・分野があると、得点が伸び悩む危険性が高まります。

また、2025年のすべての大問で文化から出題されており、ほかの私立大学の入試問題と比べたときに、文化の割合が非常に高いのが本学の最大の特徴です。文化の学習は特に入念に行う必要があります。文化のなかでも、特に気をつけたいのは、受験生の学習が手薄になりがちな近代・現代です。2025年のIVは与謝野晶子の作品を掲載した『明星』、プロレタリア文学の代表作である『蟹工船』の作者である小林多喜二、24年のIIIは、幕府の洋学教授機関である「蕃書調所」、『西国立志編』の翻訳者である中村正直、『民約訳解』の著者である中江兆民など、設問の多くが文化史からの出題でした。22

年は、明治期に「神道は祭天の古俗」を発表して弾圧された久米邦武、昭和戦前期に記紀批判の研究業績が不敬とされて弾圧された津田左右吉が出題され、21年には、新劇と新派劇、新国劇など近代の演劇における紛らわしい用語の区別を求める出題がありました。このように、近代の文化の出題が明らかに多いという傾向が見られます。

【学習アドバイス】

【出題傾向】で分析した出題傾向をふまえ、本学の志望者は以下で掲げる受験対策をとって下さい。

学習に使用する教科書は、山川出版社『詳説日本史探究』です。解説でも指摘したように、本学の正誤判定問題のなかには、この教科書の記述をそのまま利用した選択肢があります。ただ、教科書の本文だけが学習対象ではありません。欄外の注や史料・図版の解説なども熟読する必要があります。

論述問題対策を行う必要はありませんが、記述問題の比率が6割もあり、その大部分が字数指定されているということは、本学は志望者に歴史用語を正確な漢字で書けるようにしてくることを要求しています。誤字の有無だけでライバルと想定以上の得点差がつくことも少なくありません。歴史用語を正確な漢字で書けるよう練習を積むのは必須です。

史料を使った問題が出題される可能性はありますが、使用される史料は教科書に掲載されているものが多いので、これらを史料集の現代語訳や解説と併読しながら学習をすれば、対応が可能です。教科書に掲載されていない史料の場合、設問もヒントにしながら、何に関する史料であるのかを読み取ったうえで解答にのぞむ必要があります。

本学の入試問題には出題時期・分野に偏りが見られないのですから、志望者はバランスのとれた学習を心がけなければなりません。学習されていない時期・分野があると、思わぬ失点をする危険性が高まります。そして、全ての時代を通じて文化からの出題の比率が高いことをふまえれば、絶対に手を抜いてはならないのは文化だということです。問われている用語は「重箱の隅をつつく」マニアックなものはほとんど見当たらず、基本的なものが大部分を占めています。政治・外交などをしっかりと学習するのは当然のことですが、文化にもそれと同等のエネルギーを傾けてください。

また、2025年は旧課程履修者に不利とならないように配慮して、歴史総合からの出題はありませんでしたが、次年度からは歴史総合を絡めた出題が予想されるので、その準備も周到に行ってください。

以上のような受験対策を行い日本史で着実に得点を重ね、合格を勝ち取ってください。